

## 第5回「教職大学院フォーラム～子どもを見つめて～」実践報告

中田 正弘・向山 行雄・澁澤 文隆・砥柄 敬三

帝京大学大学院教職研究科

### 1. 2013フォーラムの趣旨

#### 授業公開とパネルディスカッションの開催

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」（2012・8）において、これからの教師に求められる資質能力として、社会の急速な進展の中で、教師が探究力を持ち、学び続ける存在であることが不可欠である（「学び続ける教員像」の確立）ことを提案するとともに、教師に必要な資質能力は、「省察」（リフレクション）の中でこそ形成されるとした。

本研究科では、以前より、授業における教師と子どもの事実を大切にしながら、自己の実践や教師としての自分を振り返ることを重視し、授業科目として「教育実践リフレクション」を実施してきたところである。

この授業は、主に次のようなねらいのもとに実施している。

- ・授業記録、プロセスレコード、ALACTモデルなどの省察技法・モデルを獲得し、省察能力を身に付けること。
- ・特に現職教員学生は、メンターとして、同僚の省察をサポートできる能力を身に付けること。
- ・グループ協同で、授業実践をもとにしたグループリフレクションに取り組み、省察能力を高めること。

そこで、今回のフォーラムでは、これまで本研究科が取り組んできた教育実践リフレクションの授業を公開し、教師が、省察能力を身に付けることの意義や方法などについて意見交換をしたいと考えた。もちろん、本研究科の特色である「医療との連携」という面から、公開する授業の一つとして、特別な

支援を必要とする子どもの指導にかかるリフレクションも取り入れることにした。

ところで、教師による授業の研究のはじまりは明治初年にまでさかのぼると言われ<sup>1)</sup>、今日に至っても、校内研修の中心的な取り組みとして、各学校で実施されている。そして、授業研究は、日本の教育の質の高さをもたらすものとして、レッスンスタディ（Lesson Study）の名のもとに世界的にも高く評価されている。

しかし、教師の力量形成を目指す取り組みとして多くの学校で展開される一方で、授業研究そのものが形式化し、教師の専門性向上には役立っていないといった指摘もある。先の中央教育審議会答申（2012）においても、校内研修等を一層活性化させ、教職員がチームとして力を発揮していけるように改善していくことの必要性が指摘されている。つまり、校内研修による学び合いを通じて、力を発揮できる教員組織に改善していくことへの提案である。

こうした背景を踏まえ、今回のフォーラムでは、『今、校内研修、授業研究の充実を考える』というテーマのもとに、パネルディスカッションを通じて、新たな授業研究・校内研究創造に向けた議論を行いたいと考えた。

今回のフォーラムでは、前半を「省察」をテーマにした3つの公開授業、後半を「授業研究」をテーマにしたパネルディスカッションとして計画を立てた。

- 1) 稲垣忠彦、佐藤学「授業研究入門」、1996年、岩波書店

## 2. 具体的計画の検討

### (1) 会場の検討

本年度のフォーラムを実施するにあたり、4月より企画会、研究科連絡会において協議を重ねてきた。当初から懸案事項に上がっていたのは、開催場所である。前年度八王子キャンパスで実施したが、土曜日開催のため、バスの運行が減ることなどから、交通の利便性をいかに確保するかということが検討された。

その結果、今年度は、帝京大学霞が関キャンパス（千代田区平河町2-16-1 平河森タワー9F）を利用し、10月12日（土）に開催することとなった。外部講師を招へいするにも、多くの方々に参観してもらうにも立地的に好条件であった。

また、霞が関キャンパスは、1フロアになっており、そこには5つの教室がある。パーティションを外すことで、200名程度収容可能な部屋も確保できる。そこで、公開授業では、3つの教室を使用し、パネルディスカッションでは、2教室をつなげた部屋を使用することとした。

### (2) 当日の計画

当日の計画についても、企画会、研究科連絡会において協議を重ねてきた。特に、会場が本研究科のある八王子キャンパスから離れているため、プロジェクターやスクリーン、音響施設等の機材の確保が懸念されたが、霞が関キャンパスには、教室数に相当する機材が整えられていることから、特段の不都合は発生しなかった。

<当日の計画>

- ① 会場のセッティング 11:05～11:50
- ② 昼食 11:50～12:30
- ③ 案内開始（1F） 12:15  
受付開始（9F） 12:30
- ④ 公開授業 13:00～14:30
  - 1) 中田・矢野・清水、学生13名
  - 2) 砥柄・小山・藤井、学生15名
  - 3) 澁澤・坂本・鈴木、学生10名
- ⑤ パネルディスカッション 14:45～16:50

### ・研究科長挨拶及びパネラー紹介

村川雅弘先生（鳴門教育大教職大学院教授）

大内美智子先生（横浜市立日枝小学校長）

石上和宏先生（江戸川区立上一色中学校長）

向山行雄（本研究科 教授）

コーディネータ

中田正弘（本研究科 教授）

### ・パネルディスカッション

### ・閉会の辞

⑥ 片づけ 16:55～17:05

⑦ ラウンジにて反省会 17:05～18:15

### (3) 広報活動

フォーラムの広報については、八王子キャンパスの広報グループの協力を得ながら、チラシの配布とホームページへの掲載という方法で実施した。

チラシについては、第1次案内を7月に作成し、文部科学省や教育委員会等の行政機関、連携協力校や関係学校、教職大学院等へ配布を行った。

また、第2次案内は、9月に作成し、さらに範囲を広げて配布を行った。

ホームページについては、8月から掲載し多くの方々に参観を呼び掛けた。

## 3. フォーラムの実際

### (1) 公開授業

#### 【公開授業1】（小学校）

ワークショップ型授業実践リフレクション

指導者：中田正弘・矢野英明・清水保徳

<ねらい>

- ・教師・子どもの授業中の具体的事実をとらえ、それらを学習過程上に位置付け、構造化を図り、授業者、参加者が協同で授業実践の良さや課題を浮き彫りにする（＝ワークショップ型授業実践リフレクション）。
- ・ワークショップ型授業実践リフレクションの手法を獲得するとともに、現職教員学生はグループ・リフレクションのファシリテータとしての能力を向上させる。

## ＜授業（90分）の展開＞

1. 授業ビデオ（20分に編集）の視聴
2. 授業の中から教師・子どもに関わる具体的事実を抽出し、学習過程に位置付け、構造化を図る。
3. グループディスカッション
4. 全体ディスカッション
5. ファシリテータによるまとめと、ワークショップの振り返り

## ＜授業の実際＞

公開授業は、現職教員学生2名、ストレートマスター11名、計13名の学生が参加し、3名の教員によって実施した。

今回の授業実践リフレクションのワークショップは、学生が事前に実践した6年社会科「長く続いた戦争と人々の暮らし」の1時間目を対象として実施したものである。

本来は、授業観察後にすぐに行うべきものだが、フォーラム内で公開授業を実施するという制約から、学生の授業は事前に実施し、当日はビデオでダイジェストを流すという方法をとった。これは、公開授業を参観された方々に授業イメージを持ってもらうためである。

さて、公開授業では、学生は2班に分かれ、それぞれの班に現職教員学生、教員が加わった。まずは、付箋に書き出した授業中の気づきを模造紙に貼り、学習過程上に位置づける。そして、できる限り自由な意見交換をしながら、付箋に書き出された成果や課題点について、ペンで丸囲みをしたり、矢印で結んだりしながらその要因や因果関係をとらえる作業を行った。この作業が、授業の構造化を図る上で極めて重要になる。

学生の実践した社会科の授業では、2枚の原爆ドームの写真（1945年と世界文化遺産に登録された1996年）が対比的に示され、そこから問題意識を高めながら長く続いた戦争と人々の暮らしにかかる学習問題を立てることをめあてとしていた。しかし、実際には、子どもたちの問題意識がそれほど高まらなかったことが課題となり、その要因を探るためのディスカッションが行われた。その過程では、発問

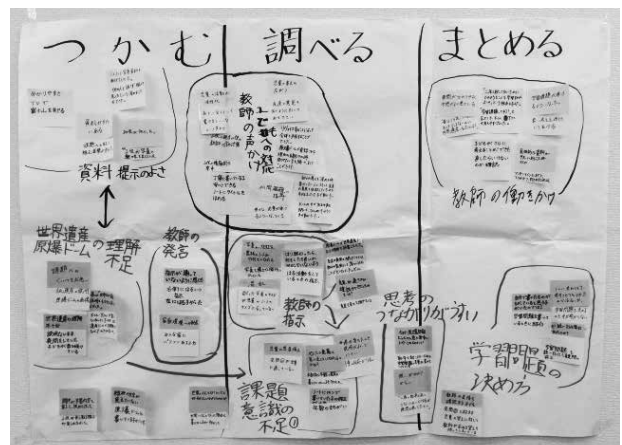
や教材の意図についての検討や、問題意識を高めるための事実把握の内容・方法についての検討が行われた。また、教材の準備が子どもたちの学習意欲の向上につながったなどの成果点についても、実際の子どもの言葉を根拠に検討された。

これらグループワークの内容は全体でシェアされ、最後にファシリテータによって論点が絞られ、議論が深められる。今回は、時間の関係で十分協議はできなかったものの、グループワークの内容を基に、主に、教材と発問、学習活動との関係について意見交換が行われた。導入段階における事実理解の不足を、子どもたちの学習意欲・問題意識の高まりと結びつけて検討できたことは、授業を構造化したことによる成果ととらえている。

今回のワークショップ型授業実践リフレクションは、授業の構造化と学生の活発な相互交流を通じて、行為の背景にある思いに気付かせようとしたも



付箋と模造紙を使って、授業の構造化を図る



授業の構造化を図った模造紙



のである。繰り返し経験することを通じて、その手法を身に付けてほしいと考えている。授業の最後には、今日のリフレクションを通じて何を得たか、そして自分はそれをどのように生かすかという視点からのまとめを行った。

## 【公開授業2】（特別支援教育）

### プロセスレコード・ALACTモデルを生かした グループリフレクション

指導者：砥柄敬三・小山恵美子・藤井靖史

#### <ねらい>

- ・特別な支援を必要とする子どもたちの指導支援の場面で、うまくいかない、どうしたらいいのだろうとを感じる場面に出会うことがある。その時の経験を大切に、プロセスレコードとALACTモデルを使ったりフレクションを行い、自己への省察を深め、次の取り組みの手立てを探る。
- ・現職教員学生は、若手育成の意識を持ち、グループワークの指導的な役割をとろうとする意欲と技能を身に付ける。

#### <授業の展開>

1. プロセスレコードとALACTモデルを使ったりフレクションの概要説明
  - ※ プロセスレコードとは、指導場面などで、コミュニケーションに齟齬や違和感をもった時に、その違和感を手放さず、自分の中にわいてきた思いや感情の根源がどこにあるかを考えるための方法。自分の具体的場面に真摯に向き合い、言葉にしていくことを大切にする。
  - ※ ALACTモデルとは、行為 → 行為の振り返り → 本質的な諸相への気づき → 行為の選択肢の拡大 → 試行 を繰り返すことにより、自己への省察を深めることである。
2. 各グループの中で事例を報告し、協議する
  - (1) 事例1を報告する。プロセスレコードを使ったグループディスカッション
  - (2) 事例2を報告する。ALACTモデルを使ったグループディスカッション
  - (3) ファシリテータによるコメント

#### 3. 全体ディスカッション

#### 4. リフレクションの授業を振り返る

#### <授業の実際>

公開授業は、現職教員学生6名、ストレートマスター8名、計14名の院生が参加し、3名の教員によって実施した。

前半は、プロセスレコードの手法で、事例1「宿題をやろうとしない児童へのかかわり」について、学生Aが報告をした。小学校4年生男子に個別にかかわることになったが、宿題をやったことがなかった児童とのやりとりに、学生Aは「違和感」を感じており、そのままワークシートに記述し、グループ協議を行った。「宿題をやる意味が分からない!」という児童に対して、宿題の意義を説明したり、気分を変えてあげればやるのではないかと粘り強く働きかけたりするが、結局やらなかったという事例に対して、グループの成員は、学生Aの気持ちや想いに焦点を当てて、本人の省察を支援していった。

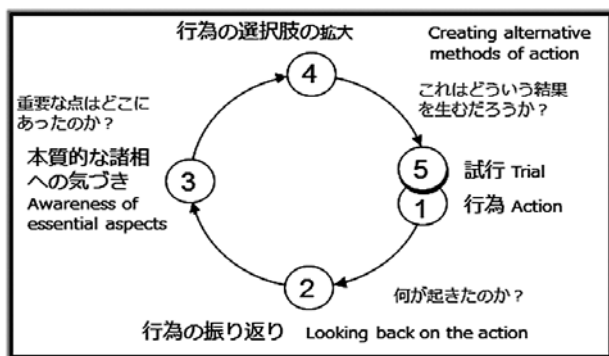
他の学生からの質問に答えて「わからないからやらないのか、できないのか、よくわからないが、○君は苛ついている感じがした。」と、児童の内面に視線を向けた発言をしている。

授業終了後の感想の中で、学生Aは「自分の中で少しモヤモヤしていた部分が少し晴れた気がした。これから○君とのかかわり方を考えるよいきっかけをいただいた。」と述べている。

事例2では、学生Bの実習校の特別支援学校での生徒（高等部2年生）へのかかわりについての事例報告があった。学生Bの前に来ると床に寝そべってしまう事例で、「なぜ寝そべるのかかわからない。」と初めは述べていた。成員からの質問に答えるなかで、作業がわからないのか、甘えなのか、疲れてくると寝そべることもあるなど、様々な仮説が立てられた。

以前のリフレクションの授業では、学生Bが生徒に寝そべられて困っている、焦りが感じられたが、今日は生徒の気持ちに寄り添おうとしているという複数の成員の感想があった。

プロセスレコードもALACTモデルも、具体的な



ALACTモデル



ALACTモデルを使ったリフレクション

事実を掘り起こしながら、その時の自分の気持ちや感情があるがままに見つめる（認める）ことから出発し、余裕の気持ちから生ずる気づき（洞察）を大事にしていることが特徴的である。

こうした手法は、事例研究のみならず、授業分析の手法としても検討する価値があると考えている。

### 【公開授業3】

他者、他教科の観察眼を活用した

教科教育リフレクション

指導者：澁澤文隆・坂本和良・鈴木博子

#### <ねらい>

学生が公開した授業をもとに、他者、他教科の観察眼を生かしたグループリフレクションを実施する。授業者は、すべての生徒に基礎学力の定着を促すワークシートの開発をめざして工夫改善に取り組んできたが、今なおそれが実現できておらず、壁にぶつかっている。他者の観察を生かした協同的なリ

フレクションを通じて、打開策を模索する。

#### <授業（90分）の展開>

- 1 授業ビデオ（25分に編集）の視聴
- 2 ワークシートを中心とする授業者の自評
- 3 小・中学校で実習している学生から見てきたこと
- 4 中学校の現職教員（他教科）から見てきたこと
- 5 全体ディスカッション
- 6 ファシリテータによるまとめと授業者のリフレクション

#### <授業の実際>

公開授業は、現職教員学生4名（理科担当1、美術担当1、英語担当2）、小学校で実習している学生2名、中学校で実習している学生（社会科担当）4名、計10名の学生が参加し、3名の担当教員及び2名の所属教員によって実施した。

なお、中学校では教科担当制が定着しており、校内研修会等はそれを前提に行うことになるから、本授業でも担当する教科が異なるといった特質を生かすリフレクションを企図した。

リフレクションの対象となる公開授業は中学校社会科歴史的分野の第4章2節「江戸幕府の成立と鎖国」の中の「貿易の振興から鎖国へ」（1単位時間扱い）であり、授業者の実習校で、前日（10月11日）に実施した。その際、本来ならばその直後に実施すべき研究協議は、本授業の場で実施することとし、行わなかった。なお、この公開授業を参観できずに本授業に参加する方々に配慮して、公開授業をビデオ撮影し、25分に編集、最初にビデオを放映し、共有化を図った。

本授業では、ビデオ視聴後、最初に授業者が取り組んだワークシートの工夫改善のポイントを中心に、どんな授業づくりを目指したか、その意図を紹介した上で、本授業では自分の壁をしっかりと把握し、生徒の主体性を促す授業やワークシートの開発を推進する手がかりをつかみたい！との抱負を述べた。具体的には、ワークシートについては、学習へ

の意欲付けを考慮して特に「めあて」の欄を「本日の課題」と改め、また、用語を書き写す小さな空欄の羅列から脱却し、生徒が自分で考えたことをしっかり書くことができるよう大きな空欄を幾つか設定したワークシートにした旨を強調した。

しかし、実際には、黒板は「書いては消す」といった作業が3回繰り返され、「本時の課題」も2回目には消されてしまったことや、授業者の意図とは別に公開授業そのものは教師主導型の講義式の授業になってしまったことが指摘された。そのため、本授業では、「授業者は生徒の主体性を促す授業、ワークシートづくりを目指したのに、実際にはそれとかけ離れた授業になってしまったのはなぜか」といった検討課題が設定された。そして、「なぜ、3回も板書を書いては消すといったことが繰り返されたのか」について分析、協議した。その結果、用語ではなく、大きな空欄に入る言葉を文章で書いたからスペースがたくさん必要になり、書いては消すことになったことが明らかになった。次に板書の内容に協議が移り、それは空欄に入るべき正答の文であり、結果的に生徒はそれを書き写す作業に追われていたこと、特に空欄が二つに分割され、左欄に自分の考え、右欄に正答の文といった作業を要請した欄が一つだけで、それ以外は正答を書く欄になっていたこと、特に公開授業の後半は大きな空欄が連続し、先生はそれについて説明しては正答を板書したこと、そのため、いつの間にか生徒も正答を書き写す作業に陥ってしまったこと、などが明らかになった。

それを受けて授業者は、なぜ正答に固執したのかを振り返り、基礎学力全員に！といった目標にとらわれ、正答をしっかりと提示することに拘っていたこと、生徒の実態を直視せず正答は教師が提示するべきと思い込んでいたことに気づいた旨が語られた。

本授業は、全体的には、リフレクションというよりは通常の研究協議のようなかたちになってしまったが、他教科の先生の指摘から社会科の先生の陥りやすい癖が露見し、改善の方向性が明確化したことは意義深かったと考える。



画像を見ながら授業を振り返る

## (2) パネルディスカッション

14時55分～16時45分の時間で、「今、校内研修・授業研究の充実を考える」というテーマでパネルディスカッションを開催した。

初めに本研究科の中田正弘教授が、コーディネータの立場からパネルディスカッションの趣旨説明を行った。その中で、授業研究は日本の学校教育を支えてきたものだが、今日では必ずしも十分な効果を発揮していないという問題提起があった。

続いてパネラーの鳴門教育大学教職大学院村川雅弘教授から、「経験や専門を越えた知のネットワーク」として、授業研究におけるワークショップ型研修の方法とその効果についての紹介があった。次に横浜市立日枝小学校の大内美智子校長から「教師を育て学校を活性化する授業研究」という内容で、自校の校内研修の取組の説明があった。さらに、江戸川区立上一色中学校の石上和宏校長から「子どもが変わる校内研修」として、特に若手教員の指導力を高める実践の説明があった。最後に、本研究科の向山行雄教授から「学校のブランド力を高める校内研修」として、保護者からの信頼を獲得するために校内研修を通して、学校のブランド力を高めることが大切であるという発言があった。

その後、フロアから各パネラーへの質問や、テーマにかかわる発言があった。その中で、教育委員会指導課長や公立小学校長、先生方から、校内研修での事例の紹介や課題などについて報告が相次いだ。

それを受けて、各パネラーでの「これからの授業





パネルディスカッション

研究の在り方」についてのディスカッションになった。まず、大内校長と石上校長が学校の経営者としての立場から、向山教授が教員養成の立場からこれからの授業研究の在り方についての提言を行った。

さらに村川教授が全国で展開しているワークショップ型校内研修についての詳しい報告と提案があった。

最後に、コーディネータの中田教授が総括を行った。その中で、クリッカー（オーディオレスポンスシステム）を使ってパネルディスカッションの満足度を尋ねた。画面に満足度の高い結果が映し出され、会場に拍手がおき終了となった。

### (3) フォーラム参加者の声

今回のフォーラムには、101名の方々の参加があった。小・中学校、特別支援学校の先生をはじめ、大学教員や学生、文部科学省・教育委員会など教育行政機関の方々、さらには出版関係の方々と、多方面からの参加を得ることができた。

会場を霞が関キャンパスにして利便性を高めたこともさることながら、「授業研究」をフォーラムの中心にしたことによる関心の高さの表れではないかととらえている。

アンケートをもとに、参加された方々の声を紹介したい。

#### 【公開授業1（小学校）を参観して】

○どんな授業省察力（教職専門性）の育成を目指し

てワークショップ活動をするのか、そのねらいが明確でわかりやすいものでした。単なる活動ありきのワークショップでなかった点で、私自身の今後の学生指導に活用させていただきたいと思います。（大学教職員）

○自校の校内研では、授業後の振り返りは授業学年からの授業の視点についてを柱においてグループで話し合いをしていましたが、今回のようにすると、授業全体がみられ、それに構造化されているので、ぱっとわかるので効果的だし、やってみたいと思った。また付箋が2色で、教師・子どもの事実をもとに黄色の付箋を組み合わせさせていたのも勉強になりました。（小学校教職員）

#### 【公開授業2（特別支援）を参観して】

○表面に現れる現象の背後にある原因を見つけるためには、多面的な視座が必要であり、本手法は必要だと感じた。教師の考えが固まらないようにすることが重要か（大学教職員）

○始めは、このグループでのディスカッションが何を意図するものか理解できませんでしたが、徐々にお互いの暗黙知を言語化していく作業だということに気づきました。学校現場ではあまりにも忙しすぎて、結論のみ求める傾向が強いので、リフレクションの効能が理解できなかったのだと思います。でもとても重要なワークだと思いました。（小学校教員）

#### 【公開授業3（中学校）を参観して】

○教職大学院の教師集団のリフレクションについて、観点の多様性が良かった。

○学生を育てていくとする雰囲気がとても感じられた。授業は参観していないが、やはり教員として生徒たちとの距離感がもっと近くなければならないことをベテランの先生より指導があった。学生ということもあり、授業で行うこと、単元を進めること、ワークシートの作成だけにこだわらずにすぎたのではないかなと思う。自分の専門とする教科を通じて、目の前にいる子どもたちに何を伝え、どのようになってもらいたいかを考えてい

くことが必要だと思う。(中学校教職員)

もちろん、このほかにも多数ご意見・ご感想をいただいた。特に、今回、リフレクションをテーマにしたが、これまでの振り返りや研究協議とどこがどう違うのかといったご指摘や方法的な課題点についてもご意見をいただいた。ぜひとも今後の改善につなげていきたいと考えている。

### 【パネルディスカッションに参加して】

- 信頼される学校づくり、働き甲斐のある学校づくり、子どもが行きたいと思う学校づくりのために、授業研究の大切さが再確認できた。さまざまなアイデアを得られたのと、校長のリーダーシップ、ミドルリーダーの大切さについても理解できた。(教育委員会)
- 校内研修(若手研修)に意義を見出せずにいましたが、とても大きなヒントをいただきました。校内研の協議会で若手も発言できるよう努力していきたいと思います。(小学校教職員)
- 校内研究、特に授業研究を効果的に進める具体的な手立てをうかがうことができた。授業研究をすることがいかに大切であるかをパネラーの先生方のお一人お一人からうかがうことができた。(中学校教職員)

### (3) 成果と今後の課題

今回のフォーラムは、外部からの参加者が100名を超え、研究科の教員や院生をあわせると200名近い参加者となった。

多くの方々が参加してくださった背景を2つの側面からとらえている。

その一つは、「省察(リフレクション)」そして「授業研究の創造・活性化」に対する教育現場の関心が高かったことである。今回の公開授業では、小学校社会科授業、中学校社会科授業、そして特別支援教育にかかる指導場面を取り上げて、本研究科が実践しているリフレクションの手法を紹介した。小学校の授業会場には大変多くの方が参観されたため、ワークショップそのものが見えづらかったとい

う反省点はあるものの、具体的な手法を授業を通じて紹介できたことには一定の評価をいただくことができた。

また、パネルディスカッションでは、鳴門教育大の村川教授、横浜市立日枝小学校の大内校長先生、江戸川区立上一色中学校の石上校長先生をお招きし、本研究科の向山教授が加わって、多様な立場、視点から授業研究の意義や活性化への手立てについて語りあった。クリッカーを使って、参加者の反応をとらえながら進めたが、大変関心が高く、たくさんの意見・質問があった。終了後のアンケートでは、授業研究の改善・活性化に向け、具体的な手立てを得ることができた等、多くの方々から高い評価をいただいた。

もう一つは、地の利の良さである。今回は地下鉄永田町の駅から徒歩2分にある霞が関キャンパスで実施した。他県から参加してくださった方も多く、おそらく交通の便の良さによるものととらえている。

課題となったのは、時間配分である。今回のフォーラムは、公開授業とパネルディスカッションの2本立ての企画であったが、13時開会、17時閉会(240分)という制約の中で、かなりタイトなタイムテーブルとなってしまった。実際には、公開授業が90分、そしてパネルディスカッションが110分であり、あいさつや準備、移動、休憩を含めると、全体として時間に追われるような状態になってしまった点は否めない。どちらかにウェイトをかけるような運営も工夫する必要があるだろう。

また、内容面では、今回は「省察」と「授業研究」を前面に出し、公開授業のなかで医療との連携にかかる内容を提案した。学校教育の課題は極めて多様かつ複雑である。学校現場のニーズを鋭敏に察知しつつ、参観者と共に考え、語り合えるようなテーマ・内容を今後とも検討していく必要があると考える。